

相互行為研究の教育場面への応用可能性
-留学生のためのキャリア教育実践の場合-

Application of Interactional Analytic Approach in Educational Contexts :
A Case Investigation on Employability Enhancement Training Program

池田佳子 (関西大学国際部)

バイサウス・ドン (関西大学教育推進部)

Keiko Ikeda (Kansai University, Division of International Affairs)

Don Bysouth (Kansai University, Division for Promotion of Educational Development)

キーワード 相互行為研究、会話分析、マルチモーダル分析 / International analysis,
Conversation analysis, Multimodal interaction analysis

1. はじめに

著者らは、エスノメソドロジー、会話分析 (Conversation Analysis) 等の手法を用いて、あらゆる相互行為場面を考察し、人間の他者に対して行う社会的行動の規範、特に暗黙知として形成されているものを明らかにするという研究を基盤としている。以下、本稿ではこの研究アプローチを「相互行為研究」と呼ぶ。意味交渉、意思伝達、話し手の既知・未知情報の表示といった汎用的な活動を行う際の言動秩序の解明に加えて、依頼、受諾、拒否、否定、合意といったスピーチアクト (Speech Act)、言語を主な手段として他者へ働きかける行動が、理論上ではなく現場の会話場面においてどのように顕在化していくのかを明らかにする。このアプローチの教育場面への応用は、外国語学習場面を中心に多くの先行研究事例がある。言語学習者 (学生) と教師間の会話分析や、学習者間のやり取りを考察したものなど、教室現場一つをとっても多様な切り口がある。「教育の現場」とは、いわゆる教室内で展開する、お手本のような学習場面だけを意味するものではなく、多様な日常場面や活動実践場面が含まれる。国際教育分野において事例をあげるとすれば、例えば国際寮等における外国人留学生と日本人学生の混住生活の空間は、共に食事をする、自由時間を過ごすといった生活の中に異文化対応能力を培う機会が生じる。キャンパスライフの中にも、サークルやボランティア活動といった正課外のインフォーマル

な学びの機会も多く存在する。こういった多様かつ複雑に学びの現場が埋め込まれるケースにおいても、相互行為研究のアプローチは有効である。

本稿では、このアプローチを国内の外国人留学生のための就職支援の教育、つまりキャリア教育実践の場に焦点をあて、相互行為分析を通して見えてくることについて考察する。その中でも特に、実際に採用を考えている国内企業の人事担当などの企業人と就職を希望している外国人留学生がグループワークなどを通してコミュニケーションをとる「フォーカス・グループ」に焦点をあてる。国内の日本企業への就職がいわば「ゴール」となる留学生のためのキャリア教育では、一般的に「ノヴィス・新参者」として位置づけされるのは外国人留学生側であり、その新参者が社会化されて適応すべきは「エキスパート (熟練者)」である日本企業とその文化・社会であると理解できる。座学のキャリア教育研修などの多くは、この例から外れることは稀である。しかし、本稿では、双方が「(外国) 人材の最大限の活躍」をテーマに議論するようなフォーカス・グループのようなキャリア教育の場では、従来は一方向になりがちな学びのプロセスが、Ochs(2002)が指摘するような、双方がその現場で生まれる学び・価値を交互構築していく場へと転じることがある。この現象に着目しながら分析の一端を紹介したい。

2. 相互行為研究の焦点

相互行為研究で重視される参与(participation)のとりえ方、そして関与(involvement)のとりえ方は、社会学者アーバイン・ゴッフマンの影響を大いに受け、言語行動(「発話」)による会話(相互行為)を遂行する話者の参加枠組みの手順と秩序を洗い出す会話分析研究として展開した。会話分析では、Sacks 他(1974)の発話順番交替システム(turn-taking system)の解明が話者の参与者の言語行動における参与の規則性を明示化した。多人数会話においても、どのようにそれぞれが会話への参加(ターン取得)により参加するのかを整理して描写できるようになった。「発話の重なり」や主体的な話者と受け手以外の「第三者による発話の介入」の仕組みなどの複雑な相互行為の参加構造の研究が多様な言語の話者の事例によって解明が進められている。

相互行為には、視線やジェスチャーなどの非言語モダリティの共起が必須である。言語行動に焦点化し進化していった会話分析研究と並行して、Kendon(1972)や Goodwin(1981)などをスタート地点とし、マルチモーダル分析が確立し、McNeill(1992 他)や Streeck(1988 他)のようなジェスチャー研究による貢献を取り込んだ研究路線も展開した。言語とジェスチャーをまとめり全体ととらえる視点(Kendon, 2004)がマルチモーダル分析である。例えば、Goodwin(1981)では、聞き手の非言語行動の中でも視線行動に着目し、聞き手は、話し手に視線を向けられた際に、その聞き手の役割を遂行していることを示すために話し手を見ていなければならないことを示唆した。昨今、マルチモーダルな視点の研究はさらなる進化を遂げている。参与者は、それぞれが何をしているのか、その各自の行動が次の活動の構成にどのように関わってくるのか、そして環境下で「関連性の高い要素」がなんであるか、絶えず意識しながらその場その場に関与する。この関連性の高い要素は、空間環境の中のあるあらゆる対象がそれになりうる。机、紙、ペンといったモノ(物体/objects)がその要素となることもあれば、その状況に特化し

た専門的な対象(Nevile, Haddition, Heinemann & Rauniomaa, 2014)や、時にはテクノロジー(Heath & Luff, 2012)がそれに該当する場合もある。国外の研究対象は非常に多種多様なものがある。モダリティの多様性という観点から一部取り上げると、博物館の展示物と訪問客らの参加枠組みを考察した vom Lehn 他(2001)、イギリスの地下鉄の制御室のスタッフ達の多様な機器の扱いの状況下の暗黙知としての参加の在り方を詳細に考察した Heath & Luff(2000)、またスーパーマーケットでの二人連れの買い物客がスーパーの各場所を転々としながら、その場毎にある商品と彼ら・彼女たちの新たなF陣形を繰り返し再構築しつつ相互行為に参加する様子を捉えた De Stefani(2013)や、イギリスの美術品の競売会場の多層にわたる参加者ら(司会・競売商品・競売参加者・電話などを通して参加する遠隔の買い手とその代理者など)の関与の手続きを詳細に考察した Heath(2014)など、どれもその状況の環境に応じた記号場(semiotic fields)がもたらすマルチモーダルな記号体系(Goodwin & Goodwin, 2004; C.Goodwin, 2011)を用いてそれぞれの発話・行動を構築していく様子を分析している。

国内でも、例えば高梨(2007)ではポスター発表時の説明者、聴衆、そしてポスターの三項関係の相互行為を分析し、参与者間の相互注視(mutual gaze)とポスターという対象への共同注意(joint attention)といった非言語行動が発話とともに共起されることが、会話の遂行において重要な役割を果たすことが論証されている。片岡・池田(編著)の中に収められた論文にも、ロボットと人間の参加枠組みを考察したもの(山崎他、2013)や、IT教室における教師と学習者のインタラクションの semiotic field について論じたものがある(池田・ブランド 2013)。総合的な参加者同士の関与を理解する上で、このようなマルチモーダルなインタラクションのとりえ方は大変有効であることが、会話分析を手法とする研究者に限らず認められていることを示している。

3. 応用事例：留学生のためのキャリア教育

現在の日本社会における留学生の国内就職促進の流れを受けて、外国人留学生の就職活動を支援する「キャリア教育」の需要が高まっている。キャリア教育には、一般的には、大別して2つの観点があると定義されている。1つ目は、「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育成する」という汎用的能力養成の観点である。2つ目は、「一定又は特定の職業に従事するために必要な知識、技能、能力や態度を育てる教育」といった、職業教育の観点である。この定義は、日本人学生を主に対象と見据えて形作られているものだが、外国人留学生のキャリア教育にもこの概念を当てはめることができる。留学生の場合、1つ目の観点に、「日本で働く」ことへの意識と自覚や態度の育成といった要素が加わってくる。2つ目の観点は、専門的な知識や技能の習得がその目的であるため、それぞれが望むキャリアごとに異なる内容となる。この2つ目の観点の必要性は、留学生も日本人学生もなんら変わることはない。

3.1. キャリア教育実践としての「フォーカス・グループ」

本稿で調査対象としたキャリア教育の実践は、企業人をキャンパスに招待し、企業人と留学生の勉強会（「フォーカス・グループ」）を行うものである。いわゆる座学に終わらない「キャリア教育」である。この中で展開する言語（日本語）コミュニケーションが、その活動の社会的意義を新たに創生する様子を捉えていく。

フォーカス・グループは、筆者の関与する留学生の就職促進プログラム（SUCCESS-Osaka 事業）の活動の1つで、企業人と外国人留学生の接点をより増やすことを目的にスタートした。毎月開催しており、企業からの参加者は毎回上限を20名、できるだけ新しい参加企業を優先的に誘致し、毎回テーマを絞って実施している。本稿で取り上げる事例は、2019年の5月に実施したフォーカス・グループである。

この回では、ミーティングの冒頭において外国人材を企業内で活用している中堅企業およびスタートアップ企業の事例紹介が行われた。その後、参加している企業と、国内就職を希望している留学生が5名程度の小グループを編成した。まず、参加している留学生のプロフィールを聞き込み、どのような人間なのかを理解する。そして、企業人サイドからその留学生をインターンシップ生として受け入れるとしたら、どのような活動をしてもらうかを判断し、それを会場で共有してもらう、というワークショップ型の活動を行った。

3.2. インタラクションの考察

以下の断片1は、活動の中のインタラクションの一部である。この中で、国内企業の文化・慣習の特色でもある「人材育成」としてのキャリア教育の概念も話題に上がった。ある大手のメーカー会社の人事担当者のMAが、ディスカッションの報告を行っている場面である。MCはこのフォーカス・グループの司会であり、MAの発表の主体的な「聞き手」となり、このやり取りがその場にいる参加者と共有される中、対話は展開した。MAは、以下の発話の中で、トという留学生の将来の希望を聞いたというところから発話を始める。

表1 フォーカス・グループの発話の断片1

MA:	私はSK工業のMAですけれども、トさんと話をさせていただいて、
	トさんの希望では商社という形で、ま親御さんの：え：も会社をやっているんで、その橋渡しをしたい
MC:	はい
MA	まそういったところがあって：弊社中国とのえ：取引もありますので、
MC:	はい
MA	そのようなところの橋渡しみたいな＝
MC:	＝うん
MA	ものも！やったらおもしろいのかな、というものと！（.）

MC:	はい
MA	まだ、経験ていうものも(.)まだないと思うんで、そこでもう方向を決めてることもないのかなあと＝
MC:	＝はい＝
MA:	＝うん
	まうちの会社もいろいろ教育システムもあるんで：いろんなところ(.)うち工場もありますし、
	工場に行って(.)こんな仕事、営業をやって、こんな仕事、まそういったもの、
	ジョブローテーション的なものを経験した上で！判断してもらおうというのも(.)ひとつやり方としてはあるのかなと思っております＝
MC:	＝はい、とてもあの：ありがたい視点 (0.5)インターンならではこそ＝
MA:	＝そうです＝
MC:	＝いろいろな経験を をするという、＝
MA:	＝ミスマッチじゃこ[まるので
MC:	[そうですね、本 当に：
MA:	今決めることもないのかな：[と
MC:	[おっしゃる とお리だと思います。
MA:	そういう風に思っています。

MA は、冒頭でトという外国人留学生の意思を尊重し、海外（中国）との取引の経験をインターンシップで経験できる、と述べる。その一方で、トのような学部生の段階で、すでに固定した活動内容にのみ興味を持つのではなく、「まだ、経験ていうものもまだないと思うんで、そこでもう方向を決めてることもないのかなあと」と、見識を広げるために、自身の活動範囲を広げることを提案する。次に、MA の所属する企業は幅広い業種を経

験できることを説明し、「ジョブ・ローテーション的なものを経験した上で判断してもらおうというのも1つのやり方としてある」と発言する。日本の企業の就職事情でよく取り上げられる特色として、国内の人事採用の手法は、仕事の職務内容に特化した「ジョブ型採用」ではなく、その企業を共に成長させ事業を行う構成員としての採用（「メンバーシップ型採用」）が主流であるとされる。例えば、IT 技術を取り扱うインフラサービスの企業に就職するとなると、たとえ採用された者が人文専攻であったとしても、システム・エンジニアとしての研修を受け、開発部署に一時配置され、経験を積む。一定の時期になれば、今度は人事担当になったり、企業の財務を担うような部署などにも再配置されたりすることもある。このようにローテーションを経験し、「会社」の運営を総括的に理解する人材に「育てる」ことに主眼が置かれている。

MA の発言を受けて、MC は30行目で「とてもありがたい視点」と応対し、MA の提案を肯定的に評価する。また、「インターンならではこそ」と発話を続け、MA と相互に肯定的な評価を提示している。留学生トの従来の本来の希望である「商社（貿易）に関係することだけをインターンシップで経験したい」という限定的な希望に対し、ここでは、「熟達者（企業人と司会）」が国内の企業文化・慣習の一端としての「メンバーシップ型採用」志向をより前出した会話を会場で行うことで、新参者である外国人留学生に学びの場を提供する形となっている。

3.3. 相互行為研究からのさらなる考察

フォーカス・グループ場面では、司会と、参加した企業人との間で、発話交代が時折展開している。発言を進める側は、MC の聞き手反応としての発話を要求するように、複数の TCU(Turn Construction Unit/ターンユニット)によって話を進めている。この TCU を見定め、MC も最小限の相槌表現を提示するだけではなく、話者の語りをさらに広げるような発話を行うなど、聞き手で

はなくアクティブな話し相手の役割を担っている。座学のキャリア教育が、いわゆる「一方向性」の高いコミュニケーション形式だとすれば、こちらは「双方向性」がより高いスタイルである。

この双方向の相互行為を担う話者が、どちらも「日本の企業文化」に一定精通したコミュニティのエキスパートであることが、今回のフォーカス・グループ場面を特徴付けている。

断片1では、言語社会化プロセスとして、企業側が「外国人材（留学生）」をどう扱うかが、再定義されている。最も理想的な活かし方を前向きに検討し、変化を否まない国内企業の姿勢が、そのやり取りの中で描かれた。座学のキャリア教育では、外国人留学生（新参者）に、ともすれば否が応なく「日本企業はこういったものである」と講師側から示すものになってしまうのとは、非常に対照的な言語社会化の現象である。このフォーカス・グループが担った社会化は、留学生が、日本企業の文化・慣習を学び、順応して社会人になるといった伝統的な視点とは一線を画した展開となった。言語社会化理論では、指標する社会的意味は、コミュニケーションが展開するコンテキストの変化に応じて再構成されるのが常であると捉える。この2つの相互行為性の特徴付けが、キャリア教育としての社会的意味付けの異なりを生み出したことは、この理論に基づいた説明が可能である。

司会者やフォーカス・グループの主催者は、企業や学生に強制してこのような結果を導いたのではない。フォーカス・グループは、企業側が、留学生と直接接触し、個々の志向や希望を聞き取る機会となっている。冒頭で言及したように、国内の労働人口の不足問題は深刻な状況を迎えつつある。この流れの中で、外国人材の活用に着手することが近い将来のミッションであることを、ほとんどの企業が認識している。しかし、大企業やグローバルマーケットを当初から取り扱っている中堅企業以外は、外国人材の取り込み方のノウハウを持たず、活用の仕方に悩んでいる。多くの企業が、この機会が、じつくりと外国人留学生と話す

のは初めての機会であるのが、日本の大半の企業の現実である。こういった状況下であるがゆえに、フォーカス・グループのような機会は、「外国人材の活用に関する理解」がまさに相互作用で再構築され、また、国内企業の在り方も、新しい理解を求めて、再定式化が流動的に繰り返されるのではないだろうか。

4. 終わりに

本稿では、相互行為研究が、いかなる社会的な行為の現場においても、人々が適応し、コミュニケーションを通して指標し、また相互に社会的意味をその場で再構築・相互構築していく過程を理解する上でその一助となるということ、留学生支援の現場の1つであるキャリア教育実践を事例として考察を行った。教育場面においてこのアプローチが有効であることが、本稿の事例を通して示すことができたのではないだろうか。

「文化」や「社会」は、決して静的にそのままとどまるようなものではなく、動的である。具体的には、その社会に存在する発話者間で新たな価値観が常に化学反応を経てそして形成される(Scollon & Scollon, 2001)。「社会的活動の再形成」は、社会構築主義の観点において重要な鍵となる概念である。言語社会化理論では、個々の対話によって個々の社会的アイデンティティや活動が、流動的、その場での生成により築かれるとされる(Ochs, 1993)。そのため、それぞれの場において、参加者間の双方向からの理解の「調整」が常に生じるものである(北出, 2011)。本稿で考察した企業人と留学生の接触の現場では、この双方向からの「調整」が、相互行為研究を当てはめることで観察できた。こういった、動的な価値観の共創や社会化のプロセスを何度も経験することで、国内企業はその視点をよりオープンなものへと転換し、企業の性質が、今後のグローバル化した社会や価値観、そして働き方に対して変化を遂げるきっかけとなっていくのではないだろうか。また、日本国内でのキャリアに関心を持つ外国人留学生も、単にすでにある型に押し込まれるのではなく、彼

らの存在、彼らが提供する特性や強みが、国内企業により変化をもたらすという貴重な役割を期待されていることを認識すれば、また今とは異なった意欲を持ってくれるかもしれない。

参考文献

- De Stefani, E. (2013). The collaborative organisation of next actions in a semiotically rich environment. Shopping as a couple. In P. Haddington, L. Mondada, M. Nevile (eds.), *Interaction and Mobility: Language and the Body in Motion*. Berlin/Boston: De Gruyter, 123-151.
- Goodwin, C. (1981). *Conversational Organization: Interaction between Speakers and Hearers*. New York: Academic Press.
- Goodwin, C. & Goodwin, M. (2004). 'Participation', in A. Duranti (ed.) *A Companion to Linguistic Anthropology*, pp. 222-243. Oxford: Basil Blackwell.
- Heath, C.; Luff, P. (2000). *Technology in Action*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Heath, C., & Luff, P. (2012). Embodied Action and Organizational Activity. In *The Handbook of Conversation Analysis* pp. 281-307 Blackwell Publishing.
- Heath, C. (2014). *The Dynamics of Auction: Social Interaction and the Sale of Fine Art and Antiques*, Cambridge, Cambridge University Press.
- Kendon, Adam (2004). *Gesture: Visible Action as Utterance*. UK: Cambridge University Press.
- Nevile, M., Haddington, P., Heinemann, T., & Rauniomaa, M. (2014). On the interactional ecology of objects. In M. Nevile, P. Haddington, T. Heinemann, & M. Rauniomaa (Eds.), *Interacting with objects: Language, materiality, and social activity* (pp. 3-26). Philadelphia, PA: John Benjamins.
- McNeill, D. (1992). *Hand and mind: What gestures reveal about thought*. University of Chicago Press.
- Ochs, E. (1993). Constructing social identity: A language socialization perspective. *Research on Language and Social Interaction*, 26 (3), 287-306.
- Ochs, E. (2002). Becoming a speaker of culture. In C. Kramsch (Ed.), *Language acquisition and language socialization* (pp. 99-120). London: Continuum.
- 北出慶子(2011).「構築主義的観点からの接触場面における相互行為プロセスの分析 —接触場面の新たな分析観点と意義の提案—」『言語科学研究』p.191-221.
- Sacks, H., Schegloff, E., & Jefferson, G. (1974). The simplest systematics for the organization of turn-taking for conversation. *Language*, 50, 696-735.
- Scollon, Ronald & Scollon, Suzanne W. (2001). *Intercultural communication: A discourse approach* (2nd edition). Oxford: Blackwell.
- Streek, J. (1988). *Gesturecraft: The manufacture of meaning*. (Gesture studies 2.). Cambridge University Press.
- Lehn-Dirk, Christian Heath, Jon Hindmarsh (2001) *Exhibiting Interaction: Conduct and Collaboration in Museums and Galleries*. *Symbolic Interaction*: 189-216.
- 高梨克也 (2007) 第13回研究大会ワークショップ「多人数会話における話者交替再考—参与構造とノンバーバル情報を中心に—」. 社会言語科学. 9(2): 106-111.

謝辞

本研究の一部は、以下の科学研究費の助成を受けており、その成果を共有するものとなっている。

基盤研究 B (一般)「日本企業の「内なる国際化」
—日本人・外国人材の実践対話能力の研修プロ
グラムの開発」(研究代表者:池田佳子 研究課題番
号 18H00681)

挑戦的萌芽研究「留学生の交渉力を養成する交流
型オンライン教育モデルの開発」研究代表者:池
田佳子 分担者:バイサウストン 研究課題番号
20K20709